

福玉便り

2014年4月3日(木)発行

ふ く た ま だ よ り

通巻 第23号

発行『福玉便り』編集委員会 (一社)埼玉県労働者福祉協議会・NPO法人ハンズオン埼玉・生活協同組合コープみらい埼玉県本部
編集デザイン:NPO法人ハンズオン埼玉 メール:fukutama@431279.com
連絡先:(一社)埼玉県労働者福祉協議会:〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目4-21 TEL048-833-8731
印刷協力:富士ゼロックス埼玉 端数倶楽部

今日から立ち上がることを目指して

上尾シラコバト団地での東日本大震災追悼式

3月11日、上尾シラコバト団地被災者の会ひまわりの主催で、3度目の東日本大震災追悼式が開催されました。昨年の式典で植えた3本の河津桜は、あいにく開花はまだでしたが順調に成長し、晴天の下、120人近い参加者を見守っていました。

緒に喜び悲しむような、細くて長い関係を築いていきましょう」とメールが寄せられました。

**お互い、辛い時には辛いと
言いあって**

黙祷に先立ち、式辞の言葉が述べられました。シラコバト団地自治会長の宮下さんから、「自治会として、これからは『応援』として支援していきたい。一

上尾市にお子さんたちと避難している富永さん(白河市)は、「自分たちで選んだのに、時々、なぜこの地にいるのかという気持ちになります。いつまでこの不安が続くのか、という気持ちもあります。お互い、辛い時には辛いと言いましよう」と呼び掛けられまし

た。シラコバト団地から南相馬市に戻った吉田さんは、「震災前日のことを想像すると、入学式の準備をしたり、夫婦喧嘩をしたりして、明日もまた、そんな日常が続くと思っていたのではないのでしょうか。私たちは、国・東電だけでなく記憶の風化と戦っています。第二・第三のフクシマを繰り返して欲しくありません」とお話しされていました。

言ずつメッセージを書きました。
会場を自治会集会所に移した語らいの集いでは、シンガーソングライター・内山さんの歌を聴きながら、高橋さん(石巻市)手作りの飾り寿司やパジルトーストをいただきました。
この日をもって、被災者の会ひまわりは会の名前から「被災者」を外して、「東日本大震災に咲く会ひまわり」に変わりました。

最後、ひまわりの絵が描かれた旗に、参加者が一

その後、矢澤さん(宮城県栗原市)による和太鼓の追悼演舞ののち、14時46分、被災地の方角に向けて黙祷を捧げました。

「今日から立ち上がることを姿と行動で示していきたいです」と、代表の橘さん(浪江町)。震災によって亡くなられた1万5、884人、行方不明のままの2、633人、避難生活中に亡くなられた3、048人の方々への哀悼の意を込めつつ、次への想いを共有する3月11日となりました。(編集部・原田)



「高速道路の無料措置」の延長について

避難指示区域からの避難者に対して、高速道路の無料措置を平成27年3月31日まで継続すると発表がありました(国土交通省3/10)。また、同じく、「原発事故による母子避難者等に対する高速道路の無料措置」も平成27年3月31日まで延長されるということです。(更新の手続きが必要な自治体もありますので、ご確認ください)

「浪江町復興支援員」の新規採用募集

浪江町と埼玉労福協は2014年度、埼玉県および都内の一部を対象とした浪江町復興支援員事業に取り組むことを確認しました。これに伴い浪江町から「支援員1名」が追加募集されます。詳しくは、浪江町避難生活支援係か埼玉労福協へお問い合わせ下さい。浪江町民以外でも応募できます。

政府出資の原子力損害賠償支援機構による原子力損害賠償の説明会・相談会

弁護士・不動産鑑定士が「中間指針第4次追補」を中心に宅地・建物・田畑等に関する賠償内容の解説を行います。また、相談にも対応頂けるそうです。

◇開催日時 4月27日(日) 10:00~16:00

◇会場 パストラスカぞ(加須市大字上三保225)

1階・多目的室

●第1部：説明会 10:00~12:00

避難指示区域(帰還困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域)に宅地(借地権を含む)・建物・田畑を所有等している方々を対象にした宅地・建物・田畑の賠償に関するご説明

●第2部：個別相談 13:00~16:00

原発事故により損害を受けた方全員が対象です。(自主避難含む)
※無料個別相談は1回1時間以内、継続相談も無料です。

第1部、2部両方とも要事前予約 0120-330-540

・予約受付時間9:00~17:00(年中無休)

ありがとうございます! ありがとうございます!

本誌の印刷は、『富士ゼロックス埼玉端数倶楽部』(社員ボランティア)の皆様が全面的にご協力いただいております。



「赤い羽根共同募金の災害ボランティア・NPO活動サポート募金」(ポラサポ)の助成金をいただいて、発行しています。



埼玉県内に避難されている方、みなでいっぱい話しましょう



あつまれ東北人! 福玉サロンin川越

4月9日(水)11:00~14:00

●会場 コーププラザ川越(☎048-591-7321)

川越市南通町4-4 東武東上線川越駅東口から徒歩7分
浪江町復興支援員と埼玉労福協、コープみらいが中心となって開催している「福玉交流サロン」もいよいよ5回目、今回は川越市での開催です。

お楽しみの昼食は、いなり寿司やちらし寿司、そして春の根菜を使った汁物を準備しています。さらに「福玉クイズ」への挑戦もできます。お友達、家族や知人を誘ってぜひお出かけ下さい。

震災遺児への給付奨学金

■東日本大震災で両親またはどちらかの親をなくされた児童・生徒の皆さんまたはその保護者・後見人の方へ
「みちのく未来基金」は、高校卒業後の夢を支援するために「大学への進学」を支援しています。

【給付内容】

大学・短大・専門学校の入学金・卒業までの授業料を一人あたり年間300万円を上限として返済不要で給付します。

※他の奨学金と併用して受給することも可能です。

※予備校、学校法人格を持たない専門学校・私塾など、一部対象外となる学校があります。高校3年時に学校を通じてエントリーして頂いた時点で志望進学先が対象校であるか審査があります。

※予告なしで給付条件や内容が一部変更となる場合があります。

【お問い合わせ先】

《みちのく未来基金》 〒981-3135 宮城県仙台市泉区八乙女中央5-10-8 八乙女ユナイトビル2F

電話番号 022-343-9996 (平日9:00~17:00)

詳細は、みちのく未来基金ホームページに

<http://michinoku-mirai.org/>

福玉便りのお届け作業を一緒にやったださる方、大募集

5月1日(木)13:30-16:00ごろ可能な時間で。場所:埼玉労福協

福玉便りの発送は、編集部の方々がたばたやっています。手も動かしませんが、口のほうが多く動いていると言われていました。もし、一緒に作業して下さる方がいらっしやいましたら、ご連絡おまちします。労福協048-833-8731まで。



向かい風を 揚力(飛ぶ力)に変えて

菅原美奈子さん

福島県浪江町から

さいたま市へ

ども二人は杉戸町に、主人と母は久喜の親戚に避難してきました。現在、主人と母は二本松市の仮設にいます。



避難当初

震災前は、浪江町権現堂の「はるく」というお店で、働いていました。浪江町では、皆が知っているお店でした(お店は、今年の秋に仙台で、再開の準備をしているようです)。主人は、兼業農家で会社に通信ながらお米を浪江で作っていました。でもそこではもうお米は作れないかな……浪江には帰れないかなと思っていました。「主人が作る果物を使って私がお菓子を焼いてお客様を喜んでいただく……」そんな夢を描き、いざれお店を出したいと思っていました。

そこに震災がおきて、何も

わからず埼玉県に避難してきました。震災当時は、私と子



腹に決めて全力投球で生きてみたい……それが震災後、間もなく3年が経つ今、私の中に生まれた気持ちかな。幸い、主人も元気で働いています。浪江で開店するのであれば、親しい友人もいますし、お店に来てくれる皮算用はある程度できていました。でも、この埼玉の地でのスタートは、友人たちもバラバラで、家賃を払いながらです。で、相当な不利な条件を背負ったの事だとも覚悟しています。

でも、不利な条件ばかりではないとも思っています。現にこうして取材をしていただきたり、避難しているからこそ浪江では知りえなかった故郷の方々ともつながりが持て、店の事を知ってもらえるかもしれないです。ジャンプの葛西選手も、あの大空を飛ぶジェット機も、向かい風を利用して大空に舞っていますよね。そう考えられるようになったのです。この向かい風をわたしの体全体にぶつけて、揚力(飛ぶ力)に変えていく……そう腹が決まったのです。地震と津波と放

射能ですべて壊されたけれども、得たものがあるとすればそれは自分の中の「思い込み」を壊せたことかなと思います。

多くの避難者の方、地域の方、避難者を支えてくださる方々に、この店に来て頂いて、羽を休めてもらいたい。そして、次に私のできることを来ていただいたお客様から教えていただきながら、お店を変え(良くし)てけるように頑張ろう。今、そう思っています。

(取材 編集部・福岡)

café & sweets

Nutty café(ナッティカフェ)

場所 さいたま市見沼区大和田1-463 TEL048-872-7385

営業時間 10:00~19:00 水曜日定休

店名の由来:ナッツは、お菓子づくりには欠かせないから。

「お菓子づくりが大好き。そのお菓子を食べて幸せそうにしている顔が見たいので、コーヒーでくつろげる空間を作りたいと思っています。そんな形でみなさんのお役にたてたらうれしいです。」



出で、それぞれの避難先へ別れて暮らしているみなさんが集まり懐かしそうに談笑している姿もありました。

「浪江焼きそば」「さくらさかせるぞう」など東北復興応援物販のブースや「さいがい・つながりカフェ」での双葉の今の写真展に足をとめる人でにぎわいました。

前夜祭ではけやき広場特設ステージで「双葉音頭」「相馬野馬追」「せんだん太鼓」が披露されました。旧騎西高校を出て、それぞれの避難先へ別れて暮らしているみなさんが集まり懐かしそうに談笑している姿もありました。

さいたま
シティマラソン
3/16

あれから3年 つながりを ひろがりに

3月13日のさいがいつながりカフェでは、3年間の活動をふり返ると共に、新潟・山形・福島からゲストを迎え、それぞれの地域についてお話をうかがうトークセッションが開催されました。ネットワークをひろげ、必要な支援のあり方について考える会になりました。
(編集部・伊藤)



●猪狩敏さん

榑葉町から埼玉県に避難最初に発表されたのは、日頃からさいがいつながりカフェに参加されている猪狩敏さん。猪狩さんは榑葉町から埼玉県に避難されていらっしやいます。

いくつかの避難所を転々とした後、現在のお住まいに辿りつかれたのですが、周りにもなじめずにストレスを感じていらっしやったそうです。そんなときに、さいがいつながりカフェのイベントに参加され、懐かしいふるさとの言葉で話すことができ、本当に嬉しかったそうです。
ご自宅の放射線量、また、

除染、ふるさことが破壊されてしまった問題など、現在の心境もご報告くださったあと、最後に、「今後は、男性同士のつながり」を作りたい、とお話されていたのが印象的でした。

●関純子さん

たち☆あろま

次にお話されたのは「たち☆あろま」の関純子さん。さいがいつながりカフェで、全身マッサージやハンドマッサージを行っているらしいです。また、羽生市のつながりカフェでは、アロマ入浴剤を作ったそうです。
アロマテラピーを中心と

した活動で、避難者の方、被災地の方、に『くつろぎ』と『明日への活力』をお届けしたい、と締め括られました。

●村上岳志さん

福島県自主避難・母子避難
新潟市自治連絡協議会
長／全国広域避難当事者団体
ネットワーキング代表世話人

つづいては、新潟から駆けつけてくださった村上岳志さん。村上さんが運営されている「ふりっぷはうす」には、以前、福玉編集部が、お邪魔させていただき、『福玉便り』でもご紹介しました。村上さんご自身が、当事者として、また支援者として、さらに、大学の研究者として、「避難」に向き合ってきています。

新潟県は、強制避難の方と、自主避難の方の人数が1対1。「全国的な縮図ではないか」と村上さんはお話します。
現在、新潟「市」のほうには1941人(新潟県内避難者数の41%)の方が避難されていて、7割が自主避難者であることが分かっています。
新潟市の避難者のテーマを7つ上げてくださいます

- ① 住宅に関する避難者の支援
- ② 避難元との行き来に関する支援
- ③ 子育てや進学に関する支援
- ④ 就職に関する支援
- ⑤ 家族等が新潟に来た時に一緒に過ごすための支援
- ⑥ 政治(社会テーマ)は持ち込まない支援
- ⑦ 避難者の生活再建を重要視する支援

これらは、埼玉県に避難されていらっしやる方々にとっても共通するテーマではないかと感じました。

●多田陽子さん

山形・復興ボランティア
支援センターやまがた

山形県の報告をしてくださったのは、多田陽子さん。現在、山形県には5982人の避難者の方が生活されています。山形県の大きな特徴は福島から日帰りで往復可能であること、同じ東北という安心感から、母子避難の方が多いこと、また、週末保養もさかんであることなどが上げられます。震災

から3年間、民間も行政も一緒に避難支援に関わってきた、というところも特徴です。月に1回、「支援者のつどい」という合同連絡会議が開かれています。

避難されている方からは、住み替えができない負担、人間関係の悩み、また、生活資金に困っているなど、聞かれるそうです。

ニーズは個々にバラバラで、行政による平等な支援と民間によるスピード・きめ細かい支援、それぞれの立場でできることを心掛けているとのこと。

また、そもそも、震災前から山形県にはなかったしくみ(高齢者の居場所／こころのケア／雇用／保養の取り組みなど)は、地域資源として、考えていくことが大切だ、とお話してくださいました。

●長沢涼子さん

福島県男女共生センター

最後の登壇者の長沢涼子さんは、福島県からお話に来てくださいました。震災直後から、被ばくスクリーンング会場となった職場で、100人ほど受け入れていたそ

地域のみなさんと汗をかいて

福島県双葉町 白河仮設住宅自治会長 谷 充さん

120世帯の施設に50世帯。白河駅からも近いところで、交通だけでなく買い物や役所、学校など便利な場所にあります。高齢者が多く、最高齢者は85歳の方が生活しています。

●自治会長を担うことになった経過

昨年の7月まで、埼玉県の加須市の旧騎西高校に避難していました。駅が近く、生活しやすい白河の仮設に移りました。今年の7月から自治会長を引き受けました。本日は、仕事も決まっていたのですが、この仮設のために

引き受けることにしました。

●地域との連携と自立への道

震災から時間が過ぎ、多くの方々にご支援を頂き、こまめやつて来られました。

しかし、これからのこと、町民の幸せを、仮設の役員会で話し合いました。その答えは「地域との連携と自立」でした。その実現のためには、トップが具体化を提案し、役員がまず動いて、みんなを巻き込んで、皆の課題にしていくことでした。

たとえば、集会所の前に「みんなの花壇」を作って地域の花壇コンクールに参加して、皆でやって、賞を受賞しました。また、仮設生活でみんなが使うものが必要になった時には、廃品回収をこの仮設のある白河市の地域の皆さんとやって、汗かいて、お金を作りました。そのことで、地域に繋がっている実感を皆で持つことができました。

世の中が毎日動いているのに、この仮設だけが時間が止まっているのはダメだと思っ



ています。故郷には帰れないけれど、生活(生き抜く活動)は止めてはいけない、と思います。

この仮設の周りにも、たくさんの方々が暮らしています。双葉町から、様々な事情を背負って偶然にも今の場所に避難してきたことは同じです。だから、せっかくある仮設の集会場は皆で使う。物資も仮設の人だけでなく皆で分ける。双葉町民だけでなく、白河の人とも繋がっている仮設住宅にして、普通な状態に近づけていくことが、私の任務と考えています。

福岡

(コープみらい／編集部)

女性のための 電話相談ふくしま 0120-207-440

通話料無料／全国共通番号

相談時間 月～金(祝日除く)10時～17時

主催：内閣府／福島県

協力：女性の自立を応援する会／いわきふれ

あいサポート／郡山市／いわき市

一人で悩んでいませんか？

眠れない、生活、DV、孤独感、家族、人間関係、仕事、将来の不安。被災している方はもちろん、被災者を支援している方からのご相談も対応します。秘密は厳守しますので、どうぞ安心してご相談ください。専門の相談員が担当しています(匿名でご相談いただけます)。

うです。被ばくスクリーニングは24時間体制だったので、9人で10日間、3交代制で管理し、混乱の時期を乗り越えました。

その後1ヶ月ほどしてから、相談事業／ボランティア活動支援／ビックパレット福島市の女性同士の交流の場(女性の「手仕事」の場)を作ることなどをやってきたそうです。

相談の現場から、DVがひどくなっているという声が聴かれると、長沢さんはいいます。県内に残っているも、県外に避難していても、夫・家族との関係が悪くなっているという声が増えているそうです。埼玉県に避難していらっしゃる女性

にも、女性専用コールセンターを、ぜひ活用してほしい……と長沢さんはお話してくださいました(左囲)。

その後のトークセッションでは、議員との連携、行政との連携について、住民票の問題、自治体の多様性(格差)の問題など、さまざまに声が聴かれ、意見交換がなされました。

7ページのJCNの会議に参加させていただいた時にも感じましたが、避難されている方同士が他地域との交流・連携が深まり、全体が共通する問題(住宅／住民票など)が浮き彫りになってきていると、感じています。

住宅問題〜東京の動き〜

避難した方々の住宅に関しては、災害救助法(そして関連する特別措置法)では「応急仮設住宅(借り上げ住宅等も含む)の提供期間は1年ごとでしか更新ができない」となっています。しかも、自治体によっても延長の決定・通知の時期がまちまちで、延長の有無ががざりざりまでわからないことも多く、全国的に大きな問題となっています。お隣の東京都で行われた、都と避難者の懇談会の様子と、その後の市民団体の会議を取材しました。

(編集部・伊藤)

■申し入れのきっかけと、都の回答

東京都では、2月に都から避難者の方々へのアンケートが実施されました。その中に「今後の居住先の予定についてお答えください」という項目があったのですが、6、7つの選択肢はすべて「戻る」或いは「自分でなんとかする」というものであったため、避難されている多くの方が不安になったそうです。そのため、このアンケートをきっかけに避難者の方の団体ができました。その「きびたきの会」と東京都とが情報交換する場が設けられ、直後の記者会見で会の方からお話しをうかがいました。「都の方からは、不安を与えてしまったことに関して、

「子どもにも関係して避難している人も多い。ほんどが『ある日突然動かされる』というムチャクチャな転校をした。しわ寄せを子どもにも与えたくない。」



「制度的には1年ごとに延長していくが、せめて3年、5年、10年はのばすことが可能なのではないか。進学や生活再建を考えると、それくらいの高さは必要。『国』がダメなら『都』でやってください、という願いは伝わったのではないかと期待している」

お詫びの言葉があった。ただし、国がはっきりしていないこと、被災者からの要望があること、進んで行く問題であることから、『帰還』か『自分なんとかする』という以上のことを書けなかったとのこと。

また、避難者からの「公的に都内各所で生の声を聴く場を作ってほしい」という要望に対しては、

「公的にそれを都として行うのは難しい。福島県がやってくれるのならばできる」という答えだったそうです。

■住宅問題に対する声

それに対して、「きびたきの会」の皆さんからはこんな声がかげられました。

「したら、声を上げることすらできない。避難者同士も繋がっていない。何もなければ、大きな家に住んで、普通に生活していた人も、1DK、2DKに住まわされているのが現状」

■東京都の別の動きーまずは現状調査を

その申し入れから数日後、原発事故子ども被災者支援法について考える弁護士と避難者・支援者の集まり「支援法市民会議」でも、住宅問題が話し合われ、まずは東京都49自治体に対して、住宅問題に対するアンケート調査を行うことが決まりました。

この動きには、西日本のとある公営住宅で、実際に住宅

の打ち切りが行われたという背景があります。災害救助法の適用がされている住宅に対しては、国から財政上の措置がされ、家賃補助が行われていますが、西日本の公営住宅には、災害救助法が適用されていないところもあつたようです。(そういった自治体は、財源の確保が厳しいせいか、他の借り上げ住宅よ

りも打ち切りを早め、2014年3月に必ず退去します、という誓約書を書かれたケースもあるようです。)

自治体によって対応にはらつきがある原因の一つは、2013年4月2日の国(復興庁/国交省/厚労省)が出した「地域の実情に応じて延長が必要な場合は適切な対応を」という通知にあります。これによって、「各自治体の対応にはらつきがある」という現状が生まれています。一方で、国や福島県の判断を待たず、各都道府県や、各市町村が独自施策の支援を行う可能性があるというふうにもいえます。

埼玉県でも、きちんとしたニーズ把握と、それぞれの実情に応じた制度運用が求められていると思います。みなさんは住宅についてどのような要望を持ち、お住まいの自治体ではどのような対応が実施されていますか?編集部では引き続き住宅問題について、とりあげていきたいと考えています。ぜひお声をお寄せください。



「福玉ママカフェ」 小さな声を聴く会 vol.1

地域のひとと、避難しているひとを繋ぐ、「福玉ママカフェ」小さな声を聴く会vol.1が3月12日、越谷市で開催されました。(編集部・伊藤)



自分の思いをぼつぼつと
言えるような、その思いを
その場の人たちでじっくり
聴き合えるような、そんな
温かい時間を作りたい
—という思いを込めて、福
玉便りのデザイン担当、谷
居早智世さんが中心にな
って企画した「福玉ママカ
フェ」のvol.1が、「水庵」と
いうカフェで開催されまし
た(認定NPO法人ハンズオ
ン埼玉/一豊プレーパーク
による共同開催)。

参加されたのは、谷居さ
んのほか、南相馬市から避
難中の高野美香子さん、い
わき市から避難中の鈴木
直子さん、埼玉県で子ど
もの「冒険遊び場」に関わ
っていらつしやる武澤麻紀
さん、東京都で食育や環
境について活動している古
賀由希子さん、絵本の読み
聞かせをやつていらつしや
る高松朋子さん、東海村
の臨界事故のときにお母
さんの話を聴く会を開い
てこられた吉田知津子さ
ん、(取材・伊藤)の計8
人。

カフェ&ギャラリー 『水庵 Sui-an』

住所:越谷市小曾川705
TEL:048-974-5162
営業時間:Open 10:30-Close 17:00
定休日:月・火



「大切なひとをここに連れてくる」と「水庵」を予約してくださった武澤さん。木々に囲まれたこじんまりとしたカフェで、自家栽培の野菜を使ったおいしいランチが食べられます(写真)。ぜひ、機会があれば足を運んでみてください。

「大切なひとをここに連れてくる」と「水庵」を予約してくださった武澤さん。木々に囲まれたこじんまりとしたカフェで、自家栽培の野菜を使ったおいしいランチが食べられます(写真)。ぜひ、機会があれば足を運んでみてください。

「住まいを見つける、子どもを学校に送る、というところの手続きまでは、必死でした。そのあとから、じわじわと、哀しい、という気持ちが出てきました」「ひっそり過ごそうと、毎日が普通に終わることを繰り返してしまいました」「みんなを置いてきちゃった、という罪悪感を抱えていました」「子どもには強く生きてほしい、と願つています」

「古賀さん」
「東海村の臨界事故のときに作ったお便りの中の『子どもたちの声』の、『大人に言いたいコト』という特集で、『もうがんばらなくていい、がんばつてくれて、ありがとう』というひとことが忘れられません」(吉田さん)

「また、参加された方も、避難のお話を聞いて感じたこと、或いはご自身の経験と重ねて感じたことなど、お互いのことを深く知り合う機会に。」
「ひとのものをさしに合わせなくていいんですよね」

「小さな部屋で、少ない人数で、そのひとの温度を感じながら、本音を話せることの大切さをしみじみ感じる、温かい時間に立ち合せていただきました。」
「避難しているひとと同志のつながり、「避難」という枠を超えた地域のひとたちとのつながり、いろいろな、人と人とのつながりが広がって「一緒に考える時間」が増えていきますように。」

第2回 広域避難者支援ミーティング・全国版

3月18日、東日本大震災支援全国ネットワーク(JCIN)主催による「第2回広域避難者支援ミーティング・全国版」が都内で開催され、『福玉便り』編集部からは伊藤・永田・西川・原田が出席いたしました。

第1部のパネルディスカッションでは、「とつとり震災支援連絡協議会」の福井さんから、「戸別訪問しても最近はなかなか声があがつてこないで、一度気持ちを吐き出してもらう必要がある」「西に行くほど一般市民の関心が薄いので、県庁や県議会、さらには一般市民の意識を変えていきたい」といったお話がありました。また、関西で毎週メールニュースを発行している「県外避難者西日本連絡会」・まるつと西日本の古部さんからは、「主義主張を決めないという方針で多様な情報を載せて、受け取った側を選んでもらう」「いろんな方の体験談を載せて、『あなたは一人じゃない』というメッセージを発している」といった工夫や、NHK大阪放送局と合同で関西の自治体向けに実施した「公営住宅入居期限調査」の結果などが

報告されました。第2部は3つの部屋に分かれてグループディスカッションが行われました。原田が参加したグループでは、山形・新潟・福島・茨城・神奈川・京都などの支援団体の方々とご一緒し、「警戒区域からの避難、福島県からの区域外避難、岩手県・宮城県からの避難、関東地方からの避難で置かれた状況の差が大きくなっており、区域再編によってさらに細分化している」避難先の自治体を巻き込んでいく必要があると、避難元の情報がきちんと届くことも必要、「避難者だけを対象にした支援活動はいずれ行き詰る可能性があり、PTAなどの既存の地域活動に移行していくことも重要ではないか」「避難」や「孤立」という言葉を改めて考え直した方がいいのではなか」といった議論が活発に展開しました。

『福玉便り』では昨年度に北海道・山形・新潟の支援団体への取材記事を掲載しましたが、今年度も引き続き、他県との情報交換を行っていく予定です。

(編集部・原田)

